

# 石垣島の豊年祭にみるポエティクス

武黒麻紀子

(早稲田大学)

## 1. はじめに

西洋で「詩学」と言えばアリストテレスにさかのぼる。古代ギリシャ以来の詩学という学問分野は、人間の創造力(creativity)と想像力(imagination)が生む、「詩」というアートや作品、またそれが集合的に編み出す文化がどのような歴史性、民族性や芸術性に根ざしているのかを追求する壮大な学といえよう。

言語人類学では、西欧のことばの伝統からは遠く、政治的にも弱い、覇者の立場にいない人々の「声」を探そうという意識から民族詩学(エスノ・ポエティクス)が勃興した。この分野を牽引してきたのは、1970年代ごろからネイティブ・アメリカンの語りに注目した Hymes, Tedlock, Friedrich らである。現在に至っても民族詩学が言語人類学の主流にあるとは言い難いが、その分析手法を使って現実の諸問題に資する研究を行おうという試みも最近では少なからず見られる(Blommaert 2006, Kroskrity & Webster 2015)。Blommaert(2006)は、ベルギーのアントワープに到着した船を降りたアフリカからの難民の語りを分析し、難民の拙いと思われる英語の語りにも一貫した詩的構造が見られることを明らかにした。西洋語の語りの詩的構造に慣れ親しんでいる審査官の耳には、難民たちの語りは明瞭さや説得力に欠けるもの、また辻褄が合わないものと聞こえてしまう。その結果、難民申請拒否という事態が実際に起きている一方で、響鳴や並行性に着目すると難民たちの限られた英語力ではあってもそこには詩的な反復構造が存在し、決して支離滅裂な話を展開しているわけではないことが見て取れる。しかし、難民申請の現場ではそれが理解されないがゆえの政治的な不均衡が存在していることが、民族詩学の手法を通して炙り出されている。民族詩学の応用的な側面にも光が当たり始めているとはいえ、民族詩学ではスピーチを中心に「指示されたこと」(言われたこと)が分析の大半を占めていた。それに対し、人が体全体で表現する創造性やリズムなどにも着目しようと分析

の守備範囲を広げつつあるのが Kataoka (2009, 2010, 2011, 2012), 片岡(2018) である。Kataoka・片岡の一連の研究では、言語、音声、身体、環境、文化的背景を包括的に取り入れる試みがなされてきた。こうした研究を通じ、Kataoka(2018)では「プルリ・モダリティ(plurimodality)」という鍵概念も提案された。言語学でもすっかり浸透したマルチモダリティの概念に対し、Kataoka(2018a)の説くプルリ・モダリティは、言語・ジェスチャーといったコミュニケーションに直接かかわる認知的側面に加え、それを取り巻く事物や環境、文化的要因が関わり合った結果、実際の事象は各要素の単なる和以上のものを生んでいるといった全体性、その包括性、創造性にも重点を置いている。パフォーマンス(実践)としてのポエティクスを、言語やハンドジェスチャー、目線、体の向きといったこれまでのマルチモダリティの分析範疇に留まらず、観衆やメディアなどの媒体の介在、それを下支えあるいはそれに影響を与える言語・文化イデオロギーや価値観、環境的要因をも取り込み、包括的にとらえようとする発想である。

本研究では、ともすればかき消されてしまう弱者の声を拾おうとしたハイムズらが編み出した言語構造に基づく民族詩学の分析方法を軸に、Kataoka(2018)が指向するプルリモーダルなアプローチを組み合わせながら、詩的実践の包括的分析に取り組んだ結果を紹介する。

## 2. 分析の前提

### 2. 1. ハイムズの分析枠組み

ハイムズは、ナラティブには音声、語彙、また形態統語要素の点で、行(line)、節(verse)、連(stanza)、段(scene)、場(act)を同定し、これらが階層性をもって構成されていることを詩的実践の分析に用いた。その際に、特に重要視したのは、語彙レベルや行レベルではなく、節や連といった中間レベルでの並行性である。というのは、この中間レベルでの連鎖にこそ、ある言語や文化の特有な詩的な「型」が見られると考えたからである。

本研究の分析では、「句」「行」「連」の詩的構造から始まり、文化・環境的要因へと向かいながらその連環を探る。ハイムズの分析は、言語構造の中の小さな単位から大きな単位へと向かっていったボトムアップ手法とされるが、それ

だけでは全体性に迫り切れないことも多い。そこで本研究は、より大きな視野（上空からの視点）に加えて個別な事例から見上げていくボトムアップの手法（地面の視点）も組み合わせていくこととする。

## 2. 2. 日本語の詩的構造

日本語の伝統的な定型詩の中で最もよく知られているのは、短歌や俳句の七、五拍から成る構造であろう。また、一本締め、三本締め、一丁締め、三三七拍子などを見ても、日本語のリズムでは全般的に奇数拍をもとにする傾向があるとされる。ただ、ハイムズ流の民族詩学の分析的観点からいえば、拍は行のレベルと考えられるため、拍より上位の分析単位、つまり行が繰り返された結果の「節」や「連」がどのように構成されているかに注目する必要がある。たとえば、三本締めでは三拍が「三度」繰り返される。子供のナラティブや広告でも俳句の影響と思われる三連構造が見られ (Minami & McCabe 1991, Takekuro 1999)、日常会話やメディア談話には「3 + 3 = 5」になる構造が見られる、と言われてきた (Kataoka 2009, 2010, 2018b)。すると、ハイムズ流の分析視点からしても、日本語とりわけ標準語の詩的構造の基底には奇数型への指向が強いと言えそうである。同様のことは地方の方言でもいえるのであろうか。そこで、本研究では、島嶼部である八重山地域の一つ、石垣島での詩的実践を分析してみる。

## 3. 石垣島の伝統行事と詩的実践：豊年祭ナラティブ事例より

沖縄本島から430キロ南に八重山の島嶼群がある。八重山諸島は、「詩の国・歌の島・踊りの里」といわれることもあるほど民謡の宝庫で、儀礼時に限らず三線を伴う民謡や踊りが日々の生活に密着している。石垣島では毎年旧暦6月に地域単位で行われる豊年祭においても、各地域で異なるものの、詩（ことば）、歌、舞踊その他のパフォーマンスが一度に見られる。

石垣方言でプーリイと言われる豊年祭は石垣全土の地域ごとに2日間に渡って行われる。1日目は御嶽(ウガン・オン)を中心にその年の豊作に感謝するオンプールという神事が、2日目は来夏世の豊年を祈願するムラプールという祭りが地域をあげて行われる。本研究者が調査した地域のムラプールでは、5つの御嶽の神司たちが東の海から神様を呼びよせ来年の豊作を願う儀式、奉納、パ

レード、出し物、綱引きが行われ、御嶽の氏子をはじめ、地域住民、郷友、観光客らが集まり大変賑やかなものとなる。本研究では2017年の豊年祭で収録したデータをもとに、豊年祭にまつわる詩的実践に注目する。本土の標準語では奇数を基底とする詩的実践の指向があるとされてきたのに対し、本土から離れた石垣島の言語実践には偶数への指向がある可能性を示す。

シンポジウムでは2例を出して説明したが、一つ一つのデータが非常に長いため、本報告書では1例のみを挙げる。ここで挙げる例は、豊年祭1日目、御嶽で準備をしていた女性に豊年祭の流れを聞いたときのナラティブである。資料1では、Wが話し手の女性、Tが研究者を指し、括弧内は重なり発話を意味する。

### 資料1：豊年祭の流れを説明したナラティブ

<p>W: 司たちが並んで あのお祈りするんですよ(明日) また海に向かって(明日) そうそう 1時ぐらいかな</p> <p>T: 1時から <b>浜での祈祷</b></p> <p>W: うん で そこで お祈りして ここで 3時ぐらいから で そのあと お祈りしたあと また ここでも 番所っていうんです ここでも お祈りをして <b>神司の祈祷</b></p> <p>お祈りが終わると あと 奉納の 儀式があるんですよ 旗頭が <b>奉納</b> 全員こうやって 奉納 旗頭の奉納があって みるく(弥勒)様っていう あの 黄色い付けて お面 白いお面かぶって 子どもたちを引き連れて ここで やって あと 婦人会の方たちの踊りがあるんですよ</p> <p>で それが終わると 今度 みち踊りっていうのが 5時から 5時から まあ 5時からだと <b>挨拶</b> いろんな方が挨拶があって</p> <p>T: うんうんうんうん 夜 夜から</p> <p>W: そのあと こうやって いろいろパレードがね <b>パレード</b> パレードがいろいろありますよ</p>	<p>T: で1時から</p> <p>W: で それが</p> <p>T: それで その 海の方に拝んで</p> <p>W: 2時かもしれない <b>浜での祈祷</b> 1時かな ごめんなさい 時間は はっきり</p> <p>W: で それで で あの OOは ほかの豊年祭と違って あの 東節っていうのがあって あのー 海の方から 何でも ニライ ニライカナイの信仰なんですよ 沖繩の 海の方から あのー 何ですか 宝の船が その海に 来たんですよって いろんな 船があって その上に いっぱい宝物が乗ってて</p> <p>で それが あの OOの部落を 繁栄させたっていうので この東節っていう唄があるんですよ</p> <p>で それで 豊年祭の前にも <b>浜での祈祷</b> このー 始まる前 あ 5時から始まるときも <b>道路で歌う</b> 司たちが 並んで この東節を唄うんですよ</p> <p>これが ほかの豊年祭にはないんですよ</p>	<p>T: ふーん</p> <p>W: そうです そうです</p> <p>T: それが 1時か 2時ぐらいから あるんですね?</p> <p>W: え 1時か 2時</p> <p>T: あ 今日か</p> <p>W: 海で 海でやって 浜での祈祷 昇東節 お番所が終わった後の 道路の前に やりますね 道路で歌う 昇東節 この東節っていうのまた</p> <p>T: じゃあ 明日がメインなんですか?</p> <p>W: あの一</p> <p>T: 今日も? 今日も?</p> <p>W: 今日 あの 御嶽のお祝いで</p> <p>T: はい</p> <p>W: 明日は パレードっていう感じですか</p> <p>T: はい</p> <p>W: で そのあと 終わったさいごに あのー 何ですか あのー この武者 武者が二人出てきて 戦いをするんですよ <b>ツナヌミン</b> つなぬみんっていうのがあって そのあとに 綱引きがあります <b>大綱引き</b></p>
--	---	--

時間	場所	式内容
14:00	浜 一番所	浜での祈祷 昇東節
15:00	公民館	旗頭おこし
16:00	オーセ (番所)	奉納
16:30	道路	道路に並ぶ 昇東節
17:00	道路	開会式 (挨拶)
17:30	道路	余興 (みち踊り、パレード)
19:30	道路	ガリー ツナヌミン 大綱引き
20:00	道路	閉会式

日本語の談話では、句、行、節を特定しにくい場合が多いので、反復や並行性に注目して全体の構造を見ていく。すると、このように長く続くナラティブでも、ある程度まとまった詩的構造を持つことが分かる。

資料 2: ナラティブのスタンザ、ヴァース分析①

W: 司たちが並んで  
あのお祈りするんですよ  
また海に向かって 明日  
1時ぐらいかな  
T: 1時?  
W: うん  
で **そこで** お祈りして  
**ここで** 3時ぐらいから (\*正確には2時)  
で **そのあと** お祈りしたあと  
また **ここでも** 番所っていうんです  
**ここでも** お祈りをして

} verse  
} verse  
} stanza  
} verse  
} verse

---

**お祈りが終わると**  
**あと** 奉納の儀式があるんですよ

旗頭が  
全員こうやって  
奉納  
旗頭の奉納があって  
みるく(弥勒)様っていう  
あの黄色い付けた  
お面  
白いお面かぶった  
こどもたちを引き連れて  
ここで やって

③ } verse  
④ } verse  
} stanza  
⑤ } verse

---

**あれ** 神大会の方たちの踊りがあるんですよ

で **それが終わると**  
今度 **みち踊り**っていうのが 5時から  
5時から **まよ**  
5時からだと  
挨拶  
いろんな方が挨拶があつて

⑥ } verse  
} stanza  
⑦ } verse

そのあと こうやって  
いろいろパレードがね  
パレードいろいろありますよ

W: て **それが** } verse???

T: で 1時から }  
それは その 海の方に拝んで }  
W: 2時かもしれない }  
1時かな }  
ごめんなさい 時間は はっきり } stanza

時間	場所	式内容
14:00	浜	浜での祈祷--①
15:00	オーセ (番所)	神司の祈祷--②
	〇〇公民館	旗頭おこし
16:00	オーセ (番所)	奉納
		旗頭--③
		イリク太鼓
16:30	道路	弥勒(みるく)--④
		夜雨節 (婦人会踊り)--⑤
16:30	道路	道路に並んで歌う
17:00	道路	開会式
		開会のことば
		実行委員長挨拶--⑥
17:30	道路	米賀祝辞
		乾杯の音頭
		余興 (みち踊り、パレード)--⑦
19:30	道路	旗頭・イリク太鼓
		弥勒踊
		婦人会「夜雨節」
20:00	道路	ほか23団体による踊り
		閉会式

録音が途中からになってしまったため、資料 2 の冒頭では verse の始まりを特定しにくいとはいえ、冒頭「～が、お祈りする」の後、「そこで/ここで、ここでも/ここでも」と 2 度ずつ繰り返されている。緑枠内の白字が示すよう「そこ/ここでお祈りして/する」の形式に基づく stanza と考えられる。しかも、二度の繰り返しは、それぞれが、浜と番所で行われる神司たちによる祈祷という 2 つの式次第を説明している。次に、「〇〇が終わると、あと、～があるんですよ」という詩的構造への展開がある。ここで、番所で行われる奉納 4 つのうち、旗頭の奉納と弥勒神の奉納をひと固まりとして「奉納の儀式」といい、そのあとの奉納でもある夜雨節は別に挙げて、奉納全体を大きく 2 つにとらえていることが構造上見て取てる。そして、「それ (一連の奉納の儀式) が終わると」からは、開会式以降についての式次第の説明が始まるが、ここでも「〇〇が終わると、あと、～があるんですよ」の詩的構造にもとづいて、実際にはいくつもある式次第のうちから、挨拶とパレードの 2 つだけがピックアップされ、並列の関係に置かれている。

この後、W は「で、それが」となったところで、調査者が「で、1時から」と割り込んでしまったために、W の発話の後続はなかったことになってしまう。

可能性の一つとして考えられるのは、「〇〇が終わると、あと、～があるんですよ」と続いたかもしれないということである。しかし、実際には、調査者が海での祈祷の時間を知りたくて話を中断させてしまったがために、ここまでの「〇〇が終わると、あと、～があるんですよ」の詩的構造が崩れ、話の展開が次へと進むことになる。

### 資料3：ナラティブのスタンザ、ヴァース分析②

時間	場所	式内容
14:00	浜	浜での祈祷 祭東節
	オーセ (番所)	神司の祈祷
15:00	公民館	旗頭おこし
16:00	オーセ (番所)	奉納
16:30	道路	道路に並んで歌う 祭東節
17:00	道路	閉会式
17:30	道路	余興 (みち踊り、パレード)
19:30	道路	ガリー
		ツナズミン
		大綱引き
20:00	道路	閉会式

資料3の冒頭においてWは「で それで で」と始め、この先も「(で+) 指示語+で/が」を持つ構造が4回出てくるが、その中を見ると「…て/で…んですよ」の連が「…て/で…んですよ」の構造を2回挟んで最初と最後に出てきている。4回目の最初だけは、冒頭の「で」が出てこない代わりに、指示語の「これ」では音が強くなり、Wがこの一連の4つの連から成るスタンザの終わりを意味していることが音によっても示される。

ただし、調査者は「指示語+が」、「…んですよ」とここまでWが使っていたものと類似性の高い構造を使いながら、終わったはずのスタンザをあたかも拡張されたスタンザのような形で(無意識に)続けようとした。あくまでも仮説の域を出ないとはいえ、標準日本語の詩的構造に影響を受けているであろう調査

者は、自分でも気づかないうちに3, 5, 7といった奇数を基底とする詩的構造への傾倒をしめしてしまっただけであろうか。調査者が、インタビュー場面でWが音で示したスタンザの終了を受け取ることができず、続けてしまったのかどうかについては検証不可能ではあるが、その前の場合と合わせて考えるとその可能性はあながち低いとも言えないように思われる。

しかし、既にスタンザの終了を自らの強い音で示したナラティブの主の語り手Wは、調査者がほぼ強引に続けたスタンザを自ら連を付け加える形で続けようとはしなかった。その代わりに、地域の特徴的な歌である東節を、同日午後、海での祈祷の際と道踊り前の道路とで2度歌うことを、拡張されたスタンザ内も含めると2度繰り返して、このスタンザを終わらせたのである。

#### 資料4：ナラティブのスタンザ，ヴァース分析③

T: じゃあ 明日がメインなんですね？  
 W: あの一  
 T: 今日も？  
 W: 今日 是 あ の 御 儀 の お 祝 い で  
 T: はい  
 W: 明日は パレードって感じですね  
 T: はい

W: 「で そのあと に 終わったさいごに」  
 あの一 何ですが  
 あの一 この武者 武者が二人出てき⑧ } **verse**  
 戦いをするんですよ  
 つなぬみんっていうのがあって } **stanza**  
 そのあとに 綱引きがあります ⑨ } **verse**

(で) そのあと に  
 ~が ある

時間	場所	式内容
14:00	浜	浜での祈祷、東節
15:00	公民館	旗頭おこし
16:00	オーセ (番所)	奉納
16:30	道路	道路に並ぶ、東節
17:00	道路	閉会式
17:30	道路	余興 (みち踊り、パレード)
19:30	道路	ガーリー ツナヌミン⑧ 大綱引き⑨
20:00	道路	閉会式 万歳三唱 閉会のことば

資料3に続く資料4の冒頭場面では、豊年祭の主要日を聞いた調査者に対し、1日目と2日目ではそれぞれ異なるイベントがあるものの、両日あって豊年祭自体が成り立つという説明を、「今日」と「明日」を並列させて行った。

それからWは「で そのあと に (イベント名) がある」といった。資料2で言及されたパレードの後には3つの大きなイベントがあるが、そのうちのひとつ「ガーリー」への言及はなく、「武者が二人出てきて戦いをする」「ツナヌミン」と「綱引き」の2つを出している。これは、この地域の豊年祭の式次第の最後を説明したナラティブでもあり、また資料2で調査者によって中断させられた式次第の説明の続きを行ったナラティブでもあると言えよう。つまり、構造的

には資料 2 で見た 2 つ目のスタンザの続きに似ているということである。資料 4 での「そのあと」は、開会式の挨拶や道踊りの一連のパレードの後を指し示し、この場面で閉会式前の式次第の全貌を説明し終えたことになる。

ここまで、一つのナラティブを例に、ボトムアップの目線から詩的構造の類似性に着目してきたが、上空から全貌を見渡すトップダウンの目線からもこのデータについて考えてみることにする。そこで、ナラティブ全体を内容と言語構造の詩的な類似性に基づいて切り分けてみた。すると、録音開始が実際のナラティブの始まりよりは遅くなってしまったとはいえ、資料 1 で見たように式次第の最初にあたる海と道路の両方で行われる神司による祈祷についての語り（スタンザ 1）に始まり、奉納の儀礼と開会式の式次第内容（スタンザ 2）へと移り、そこから地域に特徴的な歌や神話についての語り（スタンザ 3）へ発展し、途中で調査者が主導したことで地域の歌をいつ歌うか、さらに豊年祭の概要の語りが入り込むこととなりつつも、式次第の最終場面をまとめる語り（スタンザ 4）で豊年祭の流れの説明が完結することになった。このナラティブ全体が大きく 4 つに分けられるとすれば、標準日本語でこれまでに言われてきた 3, 5, 7 といった奇数を基とする詩的構造とは異なる傾向である。この一例から導かれる仮説は、石垣島のこの地域の言語実践は奇数ではなく偶数を基とする詩的構造を持つという点である。

もちろん、本分析はあくまでもパイロット研究に過ぎない。詩的実践の基底構造を同定するにあたって、より詳細な分析が求められることは言うまでもない。ただ、八重山地域全体が地理的にも日本の本土よりはるかに近い中国や台湾から言語文化、芸術面で多くの影響を受けてきたことや、移住という形で人の移動が双方向に行われてきた経緯を考えると、四言詩を持つ中国語の詩的実践の伝統にも近い偶数型の傾向が見られることはそれほど驚くべきことではないかもしれない。日本標準語あるいは他言語との関連で、この地域の詩的構造の基本形の検証とさらなる分析は今後も慎重に且つ継続的に行うべき課題としたい。



#### 4. おわりに

ここまで詩的構造の「型」に注目して分析をしてきたが、最後に、豊年祭の詩的实践自体がどのような社会文化的状況に埋め込まれているのか述べてまとめとしたい。豊年祭の儀礼は、伝統や神話に依拠し歴史の悠久な流れに沿って行われているようにみえる一方、地域社会が抱える現代的な課題と無関係にあるわけではない。技術化とともに人や物や経済が自在に動き、本土や世界の影響をより強く受けていく中で、地域性や伝統慣習をどのように保持していくのかという課題に、地域の詩的实践自体が挑戦を受けているとも考えられよう。

まず、豊年祭での儀礼の多くはもはや地域方言では行われていない。方言使用のほとんどは歌や祝詞に限られている。それすらも紙に書かれた歌詞や台詞を見ながらろうじて継承されていて、自発的な使用という意味では極めて限定的である。多くの場面で標準語が使われるということは取りも直さず方言消滅の危機を意味している。こうした地域方言消滅の危機や伝統的な社会関係の希薄化は今もなお比較的方言が話せるシニア世代の70代、80代に限らず、現在この地域の諸活動で中心的立場にある60代、50代も強く意識しているところである。儀礼の継承自体が曖昧なまま胡麻化して割愛する場面の多かった2017年の状況と比べると、2018年と2019年では伝統の回帰を果たそうとする流れとそれに向けた働きや試みが、60代、50代のメンバーを中心に強く見られた。具体的には、この世代は方言を自由に操ることができない代わりに、方言で書かれた歌詞や祝詞を大量に印刷して参加者に配ったり、公民館に残る資料をもとにかつては（方言で）行われていた儀礼を復元する動きがみられた。方言消滅の危機にあって、限定的にしか方言を使わないし使えない世代が積極的に音頭を取る形で、方言や伝統慣習を残そうとする意識が前に出始めてきたとも思われる。

豊年祭は、もともと農業や漁業を生業とする人々が豊作や豊漁を地域の信仰神に祈り、住民の連帯や「結」を高めるために行われてきた行事である。そのため集落住民全員に参加義務があるが、数年前までは集落住民以外は参加はもちろん、見ることもすらかなわなかった。それが、近年の地域振興や観光需要の高まりとも相まって外部への開放が解禁となると、その地域に移り住んできた他県からの移住者や観光客も豊年祭に観覧そして参加できるようになった。そうし

た地域外の人々や資本の増加は、地域方言の減退ともある程度関わっているよう。地域出身の若い世代ですら方言をほとんど知らないことに加え、外部者に豊年祭の意義や魅力を伝え、参加型イベントとして共に作り上げていくためには、共同体内部でのみ通用する方言だけを使うわけにはいかない。実際に、神事の議事進行やパレードのアナウンスを含めたほぼすべてが標準語で行われている。豊年祭のような伝統儀礼において、地域性を継承・維持しようとしつつも、方言が薄れつつあるゆえに課される難題からは背を向けることができない。そうした状況への対応が地域レベルで必要となる状況が生まれている。

本稿でみた W と調査者のやりとりは、標準語で一般的と言われてきた詩的実践の「型」と調査地域でのものが異なる見込みを示していた。さらに、両者とも一度身に付いた詩的実践の「型」から容易に離れられない habitus (Bourdieu1990) の堅固な有様も見て取れた。日本語の詩的実践が地域や方言により異なる型を持つとすれば、それは多様性にもなりうる点では地域のもつ強みが確認されたとも捉えられる。一方で、メディアや教育、インターネットといった制度や情報網を通じて、影響力の強い詩的実践の「型」がより影響力の小さい方を吸収したり押し切る形で、言語実践を端緒とした不均衡をどこかに生み出していく可能性もあろう。詩的実践を社会文化的背景とのかかわりで研究する意義はこうした点にあると考えている。

## 参考文献

- Blommaert, Jan. 2006. Applied ethnopoetics. *Narrative Inquiry* 16(1): 181-190.
- Bourdieu, Pierre. 1990. *The logic of practice*. Stanford: Stanford University Press.
- Hymes, Dell. 1996. *Ethnography, linguistics, narrative inequality: Toward an understanding of voice*. Taylor and Francis, London.
- Kataoka, Kuniyoshi. 2009. A multi-modal ethnopoetic analysis (Part 1): Text, gesture, and environment in Japanese spatial narrative. *Language & Communication* 29 (4), 287-311.
- Kataoka, Kuniyoshi. 2010. A multi-modal ethnopoetic analysis (Part 2): Catchment, prosody, and frames of reference in Japanese spatial narrative. *Language & Communication* 30 (2), 69-89.
- Kataoka, Kuniyoshi. 2011. Verbal and non-verbal convergence on discursive assets of

- Japanese speakers: An ethnopoetic analysis of repeated gestures by Japanese first-aid instructors. *Japanese Language and Literature* 45 (1), 227–253.
- Kataoka, Kuniyoshi. 2018a. Poetics, performance, and plurimodality: From Asia-Pacific perspectives. *Sociolinguistics Symposium 22*. The University of Auckland.
- Kataoka, Kuniyoshi. 2018b. Poetics through body and soul: A plurimodal approach to poetic performance. *Sociolinguistics Symposium 22*. The University of Auckland.
- 片岡邦好 2018. 「言語/身体表象とメディアの共謀的实践についてーバラク・オバマ上院議員による 2008 年民主党党員集会演説を題材に」 *社会言語科学* 第 20 卷 1 号, pp.84-99.
- Kroskrity, Paul V. & Anthony K. Webster. 2015. *The legacy of Dell Hymes: Ethnopoetics, narrative inequality, and voice*. Bloomington: Indiana University Press.
- Minami, Masahiko & Allyssa McCabe. 1991. Haiku as a discourse regulation device: A stanza analysis of Japanese children's personal narratives. *Language in Society* 20: 577-599.
- Takekuro, Makiko. 1999. "Culture behind wordplays in Japanese advertisements." The 18th International Humor Conference, Holy Names College.